

J.S.バッハの無伴奏チェロ組曲

J.S.バッハの《無伴奏チェロ組曲》(全 6 曲)が書かれた年代は、ケーテン宮廷楽長時代(1717-23)の前期とされる。各組曲は「アルマンド／クーラント／サラバンド／ジグ」の4つの舞曲を基本としながら、第1曲に「プレリュード(前奏曲)」を、ジグの前の第5曲に「メヌエット／ガヴォット／ブーレ」のいずれかの流行舞曲を置く構成になっている。

第1番 ト長調というチェロの運指に合った調性が、伸びやかな響きを生み出す。冒頭のプレリュードは本組曲の中でもっとも有名な楽章。間断なく続く16分音符の流れが、その背後で進む和声を浮き彫りにする。第2曲は安らぎに満ちたアルマンド、第3曲はイタリア型の急速な3拍子によるクーラント、第4曲は優雅なサラバンド、第5曲には2つのメヌエットが配され、第6曲の軽快な短いジグで曲を閉じる。

第2番 ニ短調という調性は、音楽を内省的な方向へ導く。第1曲プレリュードは、和声よりも旋律そのものに重点が置かれている。第2曲は高度な技巧が要求されるアルマンド、第3曲のシンプルなイタリア型クーラントを経て、第4曲は引き伸ばされた旋律に和音が重なり、憂愁を湛えた横顔を見せるサラバンド。第5曲の2つのメヌエットでは、主調の第1メヌエットがニ短調、第2メヌエットがニ長調で、古風な響きを醸す。第6曲のフランス風ジグは、規則正しい8小節の楽節構成による。

第3番 第1曲プレリュードは16分音符が淀みなく流れるスケールの大きな音楽。第2曲は軽やかな愛らしさを感じさせるアルマンド。第3曲は音階的な分散和音とスラーで奏されるイタリア型クーラント。第4曲は典型的なサラバンドのリズムに旋律が勝っていく瞬間が美しい。第5曲ブーレは演奏会用の小品として奏される機会も多い。第6曲は終曲にふさわしい堂々としたジグ。

D.ガブリエッリ：リチェルカーレ

バッハ以前、チェロ独奏のために書かれた最古の作品が、この無伴奏チェロのための7つの《リチェルカーレ》。ドメニコ・ガブリエッリは17世紀後半のイタリア、初期バロック音楽を代表する作曲家。本作は1689年、40年にも満たなかったその生涯の最晩年に作曲された。ガブリエッリが活躍した17世紀後半は、現在のチェロという楽器が誕生した時期であり、彼自身がチェロの名手だったこともあって、本作にも卓越した技量を垣間見ることができる。まさにいにしえのチェロの響きを聴くような味わい深さがある。